九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大学生の自我同一性との関連からみた共感性の様相：特性不安を心理的不適応の指標として

大庭, 三奈
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/18453

出版情報：九州大学心理学研究. 11, pp.127-133, 2010-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2010, Vol.11, 127-133

大学生の自我同一性との関連からみた共感性の様相
── 特性不安を心理的不適応の指標として ──

大庭　三奈　　**九州大学大学院人間環境学府**

The aspect of empathy from the relation to identity in university students: Trait-anxiety as an index of psychological unadaptability

Mina Oba（*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*）

The purpose of the present study is to catch the aspect of empathy from the relation to identity. Questionnaires were completed by 216 university students. Results of Two-way Factorial ANOVA, focusing on emotional empathy, are presented below: Among both high and low emotional empathy group, participants who cannot establish identity showed strong anxiety, therefore identity has great influence. Among high emotional empathy group, there is a possibility of participants who cannot establish identity and have strong anxiety to empathize, but it is not clear from results of the present study. In addition, results of the present study suggested that empathy includes not only positive aspects but also an unstable aspect on the character. Because people who have high empathy are thought to be sensitive to emotion of others and as a result, they also response sensitively and have anxiety.

Key Words: empathy, identity, trait-anxiety

Ⅰ．問題と目的

1．これまでの共感性研究について

我々は，日常生活の中で他者の思考や感情を理解しようとしたり，その結果何らかの気持ちや考えを抱いたりすることがあり，その反応の１つが共感である（鈴木ら，2000）。共感性は，他者をその内面から理解する方法であり，小林（2004）は「学派」を問わず心理療法で強調される要件の１つとしている。また，Rogers（1957）が治療者の態度の１つに共感性を挙げていることからも，心理療法の分野において，共感性は非常に重要な概念の１つであると考えられる。

これまで共感性については，いくつかの定義がなされており，複数の尺度が開発されてきている。まず，定義としては大きく２つに分かれており，認知的理解の側面に注目したものと情動的反応の側面に注目したものとが存在する。

認知的理解の側面を強調する定義としては，Dymond（1949）の“他人の思考，感情，行為のなかに自分自身を想像的に置き換えて，その人のあるがままの世界を構成すること”などが挙げられる。また，このような認知的理解の側面を強調する定義に基づいた尺度としては，Hogan（1969）の the Empathy Scale が代表的である。一方，情動的反応の側面を強調する定義としては，Stotland（1969）の“他人が情動状態を経験しているかまたは経験しようとしていると知覚したために，観察者にも生じた情動的な反応”などが挙げられ，Mehrabian et al（1972）の the Questionnaire Measure of Emotional が代表的な尺度である。

2．共感性を多次元的に測定する尺度について

上述したそれぞれの定義に基づく尺度は，妥当性も確かめられており，従来，数多くの研究において使用されてきたが，近年では，認知的理解と情動的反応の両側面を統合して共感性として捉えるために，新たな尺度が作成され，また一次元的に捉えられていた構造を多次元的に捉えなおそうとする試みが進んでいる。その代表的なものとして，Davis（1980）の Interpersonal Reactivity Index（以下，IRI）が挙げられる。

IRI は，認知的理解と情動的反応の両側面を含めた「視点取得」，「想像性」，「共感的配慮」，「個人的苦痛」の４つの下位尺度から構成される。「視点取得」とは，日常生活において他者の視点に立とうとする傾向を意味し，「想像性」は，架空の人物の感情や行動に自分自身をあてはめる傾向を表す。「共感的配慮」は，他者に対して暖かい感情を持ったり配慮する傾向を意味し，他者指向的な情動反応である。「個人的苦痛」は，他者の感情への反応として自分が不快な感情を抱く傾向を表し，自己指向的な情動反応とされる。これら IRI の下位尺度のうち，「想像性」に関しては，上述したように認知的理解の側面を測っているとするものと，情動的反応の側面を測っているとするものとがある。登張（2000）によ

ると，「想像性」は，共感性の認知的次元とされているが，情動性との関連が強いとされており，「想像性」の性質については結論が出ていないようである。このIRI（Davis，1983）は，桜井（1988）によって日本語版が作成されているが，登張（2003）は，IRIだけでなく他の共感性尺度も含めて，青年期用の新たな多次元共感性尺度の作成を行なっている。それによると，「共感的関心」，「個人的苦痛」，「ファンタジー」，「気持ちの想像」の4因子が抽出されており，それぞれIRIの下位尺度「共感的配慮」，「個人的苦痛」，「想像性」，「視点取得」との間に r=.74以上の非常に高い相関を示しており，各下位尺度は対応しているものと思われる。

3．共感性の肯定的側面と不安定な側面

共感性は，“一般的に肯定的な意味合いが強く，また対人関係のうえで成熟した機能と考えられる”（角田，2004）。大山（2004）が中学生を対象として行った調査結果も，情動的共感性と日常生活における適応感との間には有意な相関があり，日常生活適応感が高いほど共感性得点も高くなるというものであり，共感性の肯定的側面を支持するものと思われる。しかし，共感性が高い者の中には，一見したところ共感しているように見えるが，実際は他者の情動状態に振り回されているだけの者もいるのではないだろうか。例えば，他者の情動状態に敏感に反応し，その人が求めている役割を必死で演じようとする，一種の過剰適応の者が考えられる。そのような者の場合，共感性が高いということは，他者とのやり取りをうまく行っていくことに役立つとしても心理的には不安定な状態であり，必ずしも適応的であるとは言えないのではないか。このように周囲に合わせすぎてしまい，時には振り回されてしまう人々は，臨床場面にも存在しており，そのようなクライエントを理解するためにも，共感性の様相について吟味することには臨床的意義があると思われる。

また，共感性とは，自分以外の他人の気持ちや考えに寄り添い，それを理解することであると考えられており，治療場面において，最も基本的で重要なセラピストの機能であると考えられている。しかし，臨床場面において，セラピスト側が上述したような状態に陥り，そのことを意識化できない場合，共感によって有益なものを得ることは難しいと考えられている（角田，2004）。このような体験は，臨床場面においては，クライエントに巻き込まれる体験として捉えられている。

4．自我同一性と共感性について

他者の情動状態に振り回されている者の中には，自我同一性が拡散し自分がないために，他者に合わせる方法でしかコミュニケーションをとることができず，対人関係はうまくいっていても心理的にも不適応な状態に陥っている者がいるのではないかと考える。よって，本研究においては，上述したように振り回されている状態を自我同一性の確立の程度という観点から検討する。

自我同一性は，その確立が青年期における心理・社会的な発達課題であるとされてきており，青年期において，青年は，それまで意識されずに取り入れてきた自分に，意識を向けるようになり，「自分がない」「本当の自分がわからない」という自我同一性の危機に直面しながら，本当の自己を模索し見つけていく（志村，2004）とされている。Erikson（1959/1982）は，このような青年期を「自我同一性 対 同一性拡散」の危機の時期とした。最近では，社会的義務や責任のある立場につくことから回避したいがために，就職を避け，大学や大学院へと進学する青年の増加も指摘されており（志村，2004），青年期の中でも特に大学生は自我同一性の確立という課題を突きつけられているものと思われる。

自我同一性に関しては，現在までに様々な研究がなされており（谷，1997；砂田，1979など），数多くの尺度も作成されている（Raumussen，1964；Dignan，1965；砂田，1979，1983など）。その中でも，谷（2001）は，それまで作成されてきた尺度の問題点を挙げ，新しく自我同一性を多次元的に捉える尺度を作成している。

5．心理的不適応状態を示す指標について

共感しているように見えても実際は巻き込まれているだけの者の場合，その者はなんらかの心理的不適応を感じていると思われる。心理的不適応状態を示すものとして，不安，抑うつ，精神的健康度，ストレスなど様々な指標が考えられる。曽我（2000）によると，不安は，学習理論で二次性動因と考えられており，それを説明する概念の一つとして不安定感が挙げられている。これは，本研究において注目している，自分がなく振り回されている者の持つ不安定さに通じると思われるため，本研究においては，心理的不適応状態を示す多様な指標の中でも，不安に着目する。

また，不安には，状態不安と特性不安とが存在するとされている（Spielberger，Gorsuch et al，1970）。特性不安とは，長期的な性格特性としての不安水準であり，短期間の緊張水準の変動により生じる不安水準である状態不安とは区別されている（清水ら，1981）。本研究においては，個人の持つ不安定さに注目するため，その時どきの周囲の環境によって大きく左右され，直前の不安刺激によって反応が変化しうると考えられる，状態不安は本研究では取り扱わないこととし，特性不安にのみ焦点を当てて検討していく。

6．本研究の目的

本研究の目的は，上述してきた観点に基づき，共感性

Table 1
共感性得点及び下位尺度得点の平均値（*SD*）と *t* 検定結果

	共 感 性	共感的関心	個人的苦痛	ファンタジー	気持ちの想像
男　性	96.43（14.55）	45.24（8.03）	17.44（4.16）	17.81（5.36）	15.94（3.55）
女　性	105.42（12.62）	49.65（5.97）	18.85（3.86）	20.13（5.35）	16.79（3.05）
t 値	−4.83**	−4.61**	−2.58*	−3.17**	−1.88†

数値は各得点の平均値を表す。（　）内は *SD*。
**$p<.01$　*$p<.05$　†$p<.10$

の様相を捉えることである。その際，振り回されている状態を自我同一性の確立の程度，心理的不適応状態を特性不安という観点から捉え，検討していく。また，自我同一性が確立している者と確立していない者とが混在する時期であると考えられている青年期において，このような検討がより重要となってくると思われるため，本研究においては，青年期，その中でも大学生を対象として，共感性の様相を捉えていく。

Ⅱ．方　　法

1．手続き

2008 年 11 月下旬〜12 月上旬に，A 大学の大学生を対象とした質問紙調査を実施した。質問紙の作成にあたり順序効果を考慮し，計 6 通りの質問紙を作成した。

2．調査対象者

協力の得られた大学生 232 名（男性 119 名，女性 111 名，不明 2 名）のうち，記入漏れのなかった 216 名（男性 113 名，女性 103 名）のデータを分析の対象とした。男性の平均年齢は 20.08 歳（*SD*＝1.27），女性の平均年齢は 20.09 歳（*SD*＝1.35）であり，全体の平均年齢は 20.08 歳（*SD*＝1.31）であった。

3．調査内容

(1) 多次元共感性尺度（登張，2003）：共感性を多次元的に捉えるための尺度であり，「共感的関心」，「個人的苦痛」，「ファンタジー」，「気持ちの想像」の 4 つの下位尺度の計 30 項目からなる。「全くあてはまらない」，「あまりあてはまらない」，「どちらともいえない」，「ややあてはまる」，「非常にあてはまる」の 5 件法で回答を求め，それぞれ 1，2，3，4，5 と配点した。

(2) 多次元同一性尺度（MEIS）（谷，2001）：自我同一性の感覚を多次元的に測定する尺度であり，「自己斉一性・連続性」，「対自的同一性」，「対他的同一性」，「心理社会的同一性」の 4 つの下位尺度の計 20 項目からなる。「全くあてはまらない」，「ほとんどあてはまらない」，「どちらかというとあてはまらない」，「どちらともいえない」，「どちらかというとあてはまる」，「かなりあてはまる」，「非常にあてはまる」の 7 件法で回答を求め，それぞれ 1，2，3，4，5，6，7 と配点した。

(3) STAI 日本語版（清水ら，1981）：Spielberger et al (1970) によって作成された尺度の日本語版であり，「状態不安」，「特性不安」の 2 つの下位尺度からなるが，本研究においては，「特性不安」の 20 項目のみを取り扱う。「決してそうでない」，「たまにそうである」，「しばしばそうである」，「いつもそうである」の 4 件法で回答を求め，それぞれ 1，2，3，4 と配点した。

Ⅲ．結　　果

1．共感性の性差

多次元共感性尺度の総得点を共感性得点とし，共感性の性差について *t* 検定を行った（Table 1）。その結果，男性よりも女性のほうが共感性得点は高かった（$t_{(214)}=-4.83$，$p<.01$）。各下位尺度得点においても，「共感的関心」（$t_{(205)}=-4.61$，$p<.01$），「個人的苦痛」（$t_{(214)}=-2.58$，$p<.05$），「ファンタジー」（$t_{(214)}=-3.17$，$p<.01$）で男性よりも女性のほうが有意に得点が高かった。なお，「気持ちの想像」は有意傾向であった（$t_{(214)}=-1.88$，$p<.10$）。

2．共感性及び自我同一性と特性不安との関連

共感性得点，自我同一性得点の平均値によって，それぞれ 2 群に分類し，共感性高群 112 名，共感性低群 104 名，自我同一性高群 117 名，自我同一性低群 99 名とした（Table 2）。

特性不安得点を従属変数として，2（共感性高群・低群）×2（自我同一性高群・低群）の二要因分散分析を

Table 2
共感性得点及び自我同一性得点の平均値（*SD*）と各群の人数

	共感性得点		自我同一性得点	
	高群	低群	高群	低群
	（*N*＝112）	（*N*＝104）	（*N*＝117）	（*N*＝99）
M	100.72		80.91	
（*SD*）	（14.35）		（17.75）	

Table 3
共感性及び自我同一性の各群における特性不安得点の平均値（*SD*）と分散分析結果

	共感性高群		共感性低群		主　効　果		交互作用
	自我同一性高群	自我同一性低群	自我同一性高群	自我同一性低群	共感性	自我同一性	
平均値	46.52	55.33	44.21	53.33	5.07	87.90	.03
(*SD*)	(7.22)	(6.44)	(7.03)	(7.15)	*	**	*n.s.*

表中の主効果及び交互作用の数値は *F* 値を表す。
**$p<.01$　*$p<.05$

行った（Table 3）。その結果，交互作用は有意ではなかった（$F_{(1,212)}=.03$，*n.s.*）。主効果については，共感性高群のほうが共感性低群よりも（$F_{(1,212)}=5.07$，$p<.05$），自我同一性低群のほうが自我同一性高群よりも（$F_{(1,212)}=87.90$，$p<.01$）特性不安得点が有意に高かった。

さらに，共感性の中でも情動的共感性の側面に着目するため，情動的共感性得点の平均値によって，2 群に分類し，情動的共感性高群 108 名，情動的共感性低群 108 名とし（Table 4），それを踏まえて，特性不安得点を従属変数として，2（情動的共感性高群・低群）×2（自我同一性高群・低群）の二要因分散分析を行った（Table 5）。なお，情動的共感性を構成する下位尺度としては，「共感的関心」と「個人的苦痛」のみを含むものとした。「ファンタジー」に関しては，認知的側面と情動的側面の両側面を含んでいる可能性があるため，本研究においては情動的共感性から除くものとした。

Table 4
情動的共感性得点の平均値（*SD*）と各群の人数

	情動的共感性得点	
	高　群	低　群
	(*N* =108)	(*N* =108)
M	65.46	
(*SD*)	(9.21)	

分散分析の結果，Fig.1 に示すように，交互作用が有意傾向であった（$F_{(1,212)}=3.62$，$p<.10$）。また，主効果については，情動的共感性高群のほうが情動的共感性低群よりも（$F_{(1,212)}=12.07$，$p<.01$），自我同一性低群のほうが自我同一性高群よりも（$F_{(1,212)}=90.80$，$p<.01$）特性不安得点が有意に高かった。なお，情動的共感性の単純主効果は，自我同一性高群においてのみ有意であった（$F_{(1,212)}=15.77$，$p<.01$）。また，自我同一性の単純主効果

Table 5
情動的共感性及び自我同一性の各群における特性不安得点の平均値（*SD*）と分散分析結果

	情動的共感性高群		情動的共感性低群		主　効　果		交互作用
	自我同一性高群	自我同一性低群	自我同一性高群	自我同一性低群	情動的共感性	自我同一性	
平均値	47.95	55.04	42.95	53.58	12.07	90.80	3.62
(*SD*)	(6.70)	(7.23)	(6.85)	(6.46)	**	**	†

表中の主効果及び交互作用の数値は *F* 値を表す。
**$p<.01$　†$<.10$

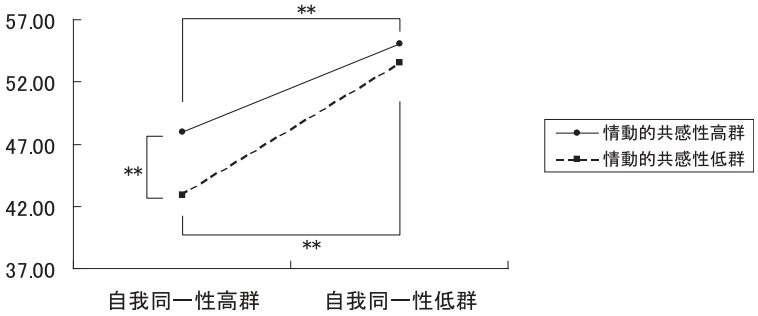

Fig.1 情動的共感性及び自我同一性の各群における特性不安得点の平均値
**$p<.01$

は，情動的共感性高群（$F_{(1,212)}=29.03$，$p<.01$），情動的共感性低群（$F_{(1,212)}=65.45$，$p<.01$）ともに有意であった。

Ⅳ．考　　察

1．共感性の性差

共感性には性差があることがこれまでの研究から明らかにされてきており，本研究においても，性差を確認した。その結果，数多くの先行研究（Eisenberg et al，1983など）と同様に，男性に比べて女性のほうが共感的であることが明らかになった。

Bem（1974）によって作成されたBem Sex Role Inventory（BSRI）は，パーソナリティの男性性・女性性を測定する代表的な心理テストとされているが，そこでは，女性性を表す形容詞として，「同情的な」，「困っている人への思いやりがある」といったものが挙げられており，本研究の結果から，女性が性役割として，実際にそのような側面を持ち合わせていることが示唆された。

また，自閉症研究で有名なSimon Baron-Cohen（2005）は，男女の脳の違いについて，男性型の脳がシステムを理解し構築するようにつくられているのに対して，女性の脳は他者の気持ちをわがことのように感じるようにつくられているのではないかと主張している。つまり，女性はそもそも“共感にすぐれた脳”を持っているということであり，本研究の結果も，このような男女の生物学的違いを反映しているのではないかと考えられる。

2．共感性の特徴

(1) 共感性のもつ不安定な側面

分散分析の結果，共感性及び情動的共感性が高い者は，低い人に比べて特性不安を高く持っているということが示された。共感性は，その性質上，共感性が高い者は他者の情動に敏感であるために，自分自身も敏感に反応し，不安な気持ちを抱いてしまっているということであろう。これまで，共感性は，“対人関係のうえで成熟した機能”（角田，2004）というように社会的スキルとして重要視されてきたが，本研究の結果より，そこには不安定な側面が含まれていることが推測される。さらに，本研究において着目した共感性の4項目の中でも特に，情動的共感性に含まれる「個人的苦痛」は，“他者の感情への反応として自分が不快な感情を抱く傾向”を測定しているとされており（鈴木ら，2000），自己指向的な情動反応とされていることから，本研究で明らかとなった，共感性のもつ一要素としての不安定な側面と深く関わってくるものと思われる。

(2) 共感性の情動的側面と自我同一性の影響

本研究においては，共感性の中でも情動的共感性に注目し，情動的共感性が高い者と低い者の特徴について自我同一性と特性不安を用いて探ろうと考えた。結果としては，情動的共感性が高い者においても低い者においても，自我同一性が確立している者に比べ，自我同一性が確立していない者のほうが特性不安を高く持っていることが示された。このことから，自我同一性の強い影響が伺え，自我にまとまりがないと不安になるのだろうと考えられる。武中ら（1995）の研究においても，高校生における自我同一性拡散得点と不安得点との間に正の相関が認められており，自我同一性が確立できていないことと不安は密接に関係しているのではないかと考えられる。

また，情動的共感性が高い者の中には，一見したところ共感しているように見えるが，実際は自分がなく他者に合わせるような態度しかとることができず，心理的不適応状態を生じている者もいる可能性が考えられるが，上述したように，本研究においては，自我同一性の影響があまりにも強いため，その点について言及するのは難しい。

(3) 青年と共感性

以上のような特徴を示す，自我同一性が確立できていない者が存在する一方で，自我同一性の確立している者の中においては，情動的に共感しやすいかどうかが重要になってくる。本研究の結果や武中らの研究結果(1995）に現れているように，自我のまとまりができ，一人の人間としてのあり方が固まってきた者においては，まとまりがないことによって揺れ，不安を喚起させられることは，自我のまとまりができていない者に比べて少ないと考えられる。しかし，一方で，本研究の結果より，情動への敏感さによって心理的安定感が脅かされ，不安を生じることはあるということが考えられる。

自我同一性の確立は，青年期における心理・社会的な発達課題であり，その達成により，青年は社会の一員としての責任ある立場を持つ「おとな」へと成長していく。そのような自我同一性が確立している者と確立していない者とが混在する青年期において，自我のまとまりがなく揺れている者も，まとまりはあるにも関わらず情動的敏感さのために揺れやすい者も存在する。青年期を把握するにあたっては，このように様々な青年像が存在することを理解しておくことが重要になってくるように思われる。

3．まとめと今後の課題

本研究では，共感性の中でも情動的反応の側面に着目しながら，自我同一性との関連からみた共感性の様相について検討してきた。上述してきたように，本研究によって，情動的敏感さと自我のまとまりのなさが心理的不適応状態と関連していることが示され，共感性の持つ不安定な側面を中心とした見解が得られた。しかし，自我同一性の影響が強く現れたことを考慮すると，本研究の結

果は，共感性の様相を明確にするには十分なものではなかったように思われる。今後は，共感性の持つ不安定な側面についても十分に吟味し，共感性を捉えていくことが重要であるとともに，以下に挙げる課題が存在するように思われる。

まず第一に，今回は，心理的不適応状態を測定するものとして，特性不安のみを用いており，他の指標については検討していない。今後は，抑うつや精神的健康度，ストレスといった他の指標を用いて再検討することで，共感性の特徴はより明らかになると考える。

また，本研究においては，自分がないことや自分の中に軸をもっていないことを自我同一性の確立の程度という観点から検討し，2群に分類して考えたが，Marcia (1966) のアイデンティティ・ステータス理論においては，二分法による捉え方はあまりに限定的で，多様な様相を示す青年期の実態を捉えるためには，「達成」，「モラトリアム」，「早期完了」，「拡散」という4つの類型に分けて考えることが大切であるとされている（宮城，2005)。このことから，自我同一性を多次元的に捉えるだけでなく，その確立の程度についても多様性を考慮することが今後の課題となりうると思われる。

最後に，本研究の結果から，共感性が高い者は，低い者に比べ，特性不安が高いという結果が得られ，コミュニケーション上重要と考えられている共感性と心理的不適応状態との関連の可能性が示唆された。しかし，共感性は日常生活において社会的スキルとして必要とされていることから，社会的適応を高めうる要素だと思われる。そのため，心理的不適応状態と社会的適応とのギャップに注目することで，共感性の特徴がより明らかになりうるのではないかと考えられる。今後は，心理的不適応状態と社会的適応といった2つの適応のあり方についても検討していく必要があるだろう。

謝　辞

本論文を作成するにあたり，貴重なご指導，ご助言をいただきました九州大学大学院人間環境学府教授の野島一彦先生，同准教授の増田健太郎先生に深く感謝申し上げます。

引 用 文 献

Bem, S. L. (1974): The measurement of psychological androgyny. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, **45**, 196-205.

Davis, M. H. (1980): A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, **10**, 85.

Davis, M. H. (1983): Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.

Dignan, M. H. (1965): Ego identity and maternal identification. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 476-483.

Dymond, Rosalind F. (1949): A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting Psychology*, **13**, 127-133.

Eisenberg, N., & Lennon, R. (1983): Sex differences in empathy and related capacities. *Psychological Bulletin*, **94**, 100-131.

Erikson, E. H. (1959): *Identity and the life cycle*. Psychological issues. New York: International Universities Press. 小此木啓吾訳編（1982)：自我同一性―アイデンティティとライフサイクル　誠信書房

Hogan, R. (1969): Development of an empathy scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 307-316.

角田豊（2004)：共感　氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕(編)　心理臨床大事典　株式会社培風館　Pp. 211-213.

Marcia, J. E. (1966): Development and validation of ego identity atatus. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.

Mehrabian, A., & Epstein, N. (1972): A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, **40**, 525-543.

宮城まり子（2005)：3．青年期・成人前期の発達特性とカウンセリング　松原達哉・楡木満生・澤田富雄・宮城まり子(編)　心のケアのためのカウンセリング大事典　株式会社培風館　Pp. 182-187.

大山智子(2004)：中学生における共感性尺度の検討と日常生活適応感との関連　昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要，**12/13**，1-7.

Rasmussen, J. E. (1964): The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.

Rogers, C. R.(1957): The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 95-103.

桜井茂男（1988)：大学生における共感と援助行動の関係―多次元共感測定尺度を用いて―　奈良教育大学紀要，**37**(1)，149-154.

清水秀美・今栄国晴（1981): STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版（大学生用）の作成　教育心理学研究，**29**(4)，348-353.

サイモン・バロン＝コーエン　三宅真砂子(訳)(2005)：共感する女脳、システム化する男脳　日本放送出版

協会.
志村玲子（2004）：モラトリアム　小林司(編)　カウンセリング大事典，株式会社新曜社　Pp. 658-659.
曽我祥子（2000）：不安　久世敏雄・齋藤耕二（編著）青年心理学事典　福村出版株式会社　Pp.210.
Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R. E. (1970): *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory* (*Self-Evaluation Questionnaire*). Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.
Stotland, E. (1969): Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 4. New York: Academic Press. Pp.271-314.
砂田良一（1979）：自己像との関連からみた自我同一性　教育心理学研究，**27**(3)，215-220.
砂田良一（1983）：価値という視点からみた自我同一性　愛媛大学教育学部紀要第Ⅰ部教育科学，**29**，287-300.
鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子（2000）：多次元共感性尺度作成の試み　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学，**47**，269-279.
武中みゆき・松山武史・荒木紀幸（1995）：高校生活の充実に関する教育心理学的研究(1) ―不安・自我同一性を手掛かりとして―　日本教育心理学会総会発表論文集，(37)，451.
谷冬彦（1997）：青年期における自我同一性と対人恐怖心性　教育心理学研究，**45**(3)，254-262.
谷冬彦（2001）：青年期における同一性の感覚の構造―多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成―　教育心理学研究，**49**(3)，265-273.
登張真稲（2000）：多次元的視点に基づく共感性研究の展望　性格心理学研究，**9**(1)，36-51.
登張真稲（2003）：青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討　発達心理学研究，**14**(2)，136-148.